

草苔^ひす屍^{かばね}、水漬^つく屍^{かばね}

(太平洋戦争従軍記)

小林



略歴

大正十年三月二十七日神戸市にて出生

〔学歴〕

東須磨小学校卒業

神戸一中〔旧制〕

卒業

神戸高商

〔旧制〕

卒業

〔軍歴〕

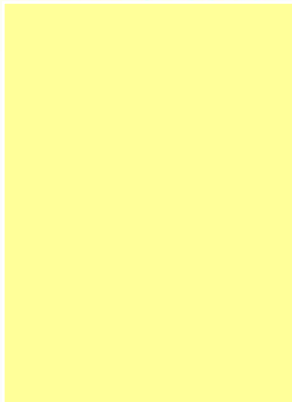
第百六連隊〔兵庫県神戸村〕

熊本陸軍教導学校〔予備士官学校〕

南海第四守備隊〔陸軍中尉〕

従七位受位

〔職歴〕





昭和18年6月
(出征直前)



昭和17年1月
(入営直前)

父	(47才)
母	(44才)
	(22才)
妹	(20才)
(弟	才にて死去)

草苔す屍、水漬く屍
目次

序	一
一、入 営	四
二、戦 場 へ	一七
三、ショートランド島（税所台）	三二
四、ショートランド島（西南台前期）	四三
五、ショートランド島（西南台後期）	五八
六、ブーゲンビル島（八重山陣地）	八五
七、終 戦	九〇
戦況・軍歴	一〇一

序

太平洋戦争体験記を書くに当たって

道德だとか法律など人間社会を律するものの考え方は、国により時代により或いは状況により同じでない。特に（国益）の為には正義が極めて不安定であることを歴史が証明している。

この数世紀の間に、ヨーロッパの各国はその武力を背景にして、世界の各地で原住民の権利を無視し、自国の国旗を打ち立てて植民地化して行った。

アジアの諸国に対しても英蘭仏等が競って自国領土化を計った。

中国に対しては阿片によって無力化しその領土或いは権益の獲得に各国がしのぎを削る状態であつた。

幸い鎖国政策を採っていた島国日本は、列強の毒牙を辛うじて免れ得たのである。そして近世目覚ましい発展を遂げ、日本自身が列強の一つに数えられるに至った。ところが日本は国内資源が乏しく、膨張する人口を支え且つ強国としての地位を保持してゆく事が困難となり、経済的に破綻の兆しが見えはじめてきた。

やがて日本は列強の世界政策と比較して非常に立ち遅れている事に気付き、周辺諸国に貪欲な目を向け始めるに至る。特に中国満洲に対しては、当時温暖な領土を渴望し南下画策中のロシアの動向も意識して、一方的に（日本の生命線）と位置付けて様々の利権獲得活動を強行した。

当然当事国中国のほかロシアや逸早く既得権を持っている列強との間に激しい衝突が生じた。こう言う国際紛争解決の為に各国は屢会議をもって協調を計ろうとしたが、所詮植民地論争であり、観念的正義論をふりかざしながら、とどの詰まりは力で国益を優先させる、力は正義なりの雰囲気の色濃く残っていた。

特に、白人先進国も既に植民地経営に或る程度行き詰まりを感じており、国際間で摩擦が生じ国益が火花をちらしている時に、有色人種の日本が割り込んで来て植民地経営を始めようとする事には我慢がならなかった。列強は一つになって干渉しようとする様子が窺われた。

当時、新興国日本は国家意識が強烈であり、列強がその侵略の歴史にかかわらず、正義の名のもとに日本を非難するのに耐え得られなかった。

そんな時代背景の中で太平洋戦争が勃発したのである。

日本は強い被害者意識の中で、慎重な対応力を失ってしまっていた。そして日清・日露の戦果の上にたって力をつけた軍部が天皇制の絶対権を利用して独裁体制を形成し、何時暴発するか判らない危機的状況となっていた。そこへ米英等列強が、日本の生活必需物資の全面的輸出禁止という苛酷な制裁を加えて来たので一挙に無分別行動に走らせてしまったのである。

日本の立場を擁護する積りは無いが、一つの観方として、汚れたそして移り替わる歴史の流れの中で日本の愚行が巻き起こした、歴史自体の泡のようにも思われる。

そしてそれは空前の悲惨な結果をもたらしたのである。

一旦戦争のひふたが切られると双方共理性は吹っ飛び、非戦闘員の大量無差別殺戮が行われ、一都市・一民族の抹殺さえ行われるのである。

しかし国際間に或いは歴史的に絶対正義の概念が無い限り、戦争勃発の危険は去らない。双方正義を唱えて殺戮を繰り返す可能性は常にある。現に今も世界各地で銃弾が飛び交っているのである。が日本は太平洋戦争において国土を焦土とした引換に国家として一番大事な教訓を得た。それは、今後どんな事があっても戦争だけはしてはならないと言うことである。戦争放棄を正義の概念の上に置いたことである。そしてそれを世界に先駆けて憲法に明文化した。

もう一つ、私自身太平洋戦争を体験して思い知らされた、非常に無念な事がある。

それは、何百万何千万の国民が、正義は何であれ只「天皇陛下のおん為に」と言う独裁軍部が

天皇を利用した世論操作に踊らされて、悔い無く、身を滅ぼし家を破綻させた事である。

海行かば、水漬く屍

山行かば、草苔す屍

大君の、辺にこそ死なめ

省みはせじ。

(古歌)

兵は天皇陛下の為に、凍りつく北辺の地或いは南海の汀に万歳を絶叫して散って行った。

この旗じるし・スローガンの怖さ！

この軍部によって創作美化された旗じるし・スローガンであっても、それに踊らされて純心な兵が、学徒が、死闘の末ばたばたと死んで行く、この悲しさ！

以下はこの酷く悲しい私の太平洋戦争体験記である。